

聖書：ピリピ 1：3～7

説教題：良い働きを始められた方は

日時：2016年10月30日（朝拝）

前回の差出人、宛先、初めの祈りに続いて、今日の3節から手紙の本文となります。まず記されているのはピリピ人に関する感謝です。パウロはこの時、ローマで投獄されていましたが、その彼の心にあったものはまず神への感謝でした。同じローマ投獄時に書かれた手紙としては他にエペソ人への手紙、コロサイ人への手紙、ピレモンへの手紙があります。このピリピ人への手紙と合わせて、これら4つは「獄中書簡」と呼ばれますが、実にどの手紙も最初に宛先の教会または個人に関する感謝が述べられています。獄中のパウロが、自己憐憫ではなく、いかに諸教会に対する心遣いで占められていたかが分かります。しかも幸いなことに、それらの教会や個人を思うごとに彼の心は感謝に満ちあふれていた。もちろん欠点のない教会はなく、それぞれに弱さや指導されるべき問題はありました。ですからそれぞれに対して手紙が書かれ、勧めがなされているわけですが、にもかかわらず、彼らのことを思い、まず神に感謝していたパウロの姿がここにあります。

そして4節には「あなたがたすべてのために祈るごとに、いつも喜びをもって祈り」とあります。ここにこのピリピ書のテーマである「喜び」という言葉が初めて出て来ます。ちなみに他の獄中書簡では、先に見た「感謝」はいずれにも出て来ますが、「喜び」は出て来ません。ピレモン書には少し後の方に「喜び」という言葉が出て来ますが、位置づけが異なります。このことは他の手紙には喜びがないということではありませんが、ここにピリピ書の特徴があると言えます。パウロはピリピ教会のことで神に感謝し、彼らすべてのために祈る時、いつも心に喜びを感じながら祈っていたのです。なぜそうだったのでしょうか。以下、3つのことを見て行きたいと思います。

第一に注目したいことは、5節にある通り、ピリピ人たちが最初の日から今日まで福音を広めることにあずかって来たことです。「最初の日から」とありますが、ピリピ伝道の最初の様子は使徒の働き16章に記されています。この町にユダヤ人の会堂はなく、パウロたちは祈り場があると思われた川岸へ行って、そこに集まった女たちに話をしました。そこで最初に福音を受け入れ、信じたのは紫布商人で神を敬うルデヤという女性でした。彼女とその家族が洗礼を受けた時、ルデヤはこう言ったと書かれています。「私

を主に忠実な者とお思いでしたら、どうか、私の家に来てお泊まりください。」つまり彼女はパウロたちをもてなし、自分の家を福音が語られるための場所として提供したのであると思われる。その後、パウロたちは牢に入れられ、看守とその家族が救われるというあの出来事が起こりますが、使徒の働き 16 章最後の節に、「牢を出たふたりは、ルデヤの家に行った。そして兄弟たちに会い、彼らを励ましてから出て行った。」と書かれていますから、確かに彼女の家が信者たちの集まる場所とされていたのだろうと考えられます。

そしてこの最初の日以来、ピリピ教会はパウロの宣教の働きを助ける教会となりました。前回も参照しましたが、この手紙の 4 章 16 節にありますように、パウロたちが隣の町テサロニケで伝道した時も、ピリピ教会は一度ならず二度までも贈り物を届けてパウロたちを助けてました。またその前の 15 節に記されていますように、マケドニヤ地方を出た後も、パウロたちを支えてくれました。パウロはコリントにいた時、最初は自分で生活費を稼がなければなりませんでしたが、ピリピ教会が支援してくれたことで、御言葉を伝える働きに専念できるようになりました。Ⅱコリント 11 章 9 節：「あなたがたのところにおいて困窮していたときも、私はだれにも負担をかけませんでした。マケドニヤから来た兄弟たちが、私の欠乏を十分に補ってくれたのです。」そしてさらにパウロがローマで鎖につながれていたこの時も、ピリピ教会はエパフロデトを遣わして愛の支援をしてくれました。まさに最初の日から今日まで、福音を広めるわざにピリピ教会は献身してくれたのです。もちろんそれはただパウロに献金を送っただけではなかったでしょう。1 章 19 節を見ると、彼らはパウロのためにとりなしの祈りをささげていたことが分かります。また 1 章後半の 29～30 節などを見ると、彼ら自身も福音の担い手として置かれたところで奮闘努力していたことが分かります。

パウロはこのようなピリピ教会との関係を「交わり」と呼んでいます。「福音を広めることにあずかって来た」と訳されている部分の「あずかる」という言葉は、ギリシャ語ではコイノーニアという言葉で、「交わり」と訳される言葉です。私たちは「交わり」と言うと、どんなことを思い浮かべるでしょうか。椅子に座ってゆっくりコーヒータイムを持つことを考えるかもしれません。固い話は抜きで、みんなで楽しくおしゃべりをしながら、和気あいあいとした時間を過ごすことのように思うかもしれません。しかしここで言われているのは、福音を広める働きにおける交わりです。これがパウロとピリピ教会との間にあった交わりです。パウロはこの彼らとの交わりを思っで喜んでいるので

す。そのことで神に感謝し、祈るたびに喜びを覚えていたのです。

第二に注目したいのは6節です。ここにはパウロの喜びのさらに深い理由が記されています。6節：「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。」これは5節とどういう関係にあるのでしょうか。5節ではピリピ人たちの素晴らしい奉仕のことが語られました。パウロはそのことを思っ喜んでいました。しかしより深いレベルで言えば、それは神が彼らのうちに始められた良い働きの現われであるということです。ここで「良い働きを始めた方」と言われているのは神です。またその神が始めた「良い働き」とは、一人一人に対する救いの働きです。時々、前後関係から、この「良い働き」は、ピリピ人たちの福音宣教の働きのことだと言われることもありますが、ここはもっと広く、彼らに対する神の救いのみわざ全体と取る方が良いと思われます。「あなたがたのうちに」良い働きがなされているということをパウロは言っているからです。単に「あなたがたを通して」良い働きがなされていると言っているのではないからです。

救いの働きが神から始まることは、ピリピ伝道の最初の実であるルデヤの回心に良く示されています。彼女はどのようにして救われたのでしょうか。使徒の働き 16章 14節に「主は彼女の心を開いて、パウロの語ることに心を留めるようにされた」とあります。「主が彼女の心を開いた」ことが事の始まりです。すなわち救いは神から出ているのです。聖書によれば、生まれながらの私たちの状態は霊的な死の状態にあるのであって、そこからは救いに至る良いものは何も出て来ません。そのためにまず必要なのは神の働きです。それは救いの働きであるから「良い働き」です。その神の良い働きがピリピ人たちの姿に現れていることをパウロは見っていました。

そしてこの節で述べられている大切な真理は、良い働きを始めた神は、その完成まで確実に導くということです。キリスト・イエスの日が来るまでということです。私たちはしばしば始めたことを途中でやめてしまいます。とりあえず何かに着手しますが、途中で気が変わったり、あるいはあまりうまく行かないと感じて放り投げてしまう。途中で頓挫してしまいます。しかし神にそういうことはありません。神が何かをなさるとすれば、それはご自身の完全な計画に基づいて、その第一歩を踏み出されたということです。ですから神が始めた良い働きは必ずゴールに至るまで導かれるのです。それはキリスト・イエスの日、すなわち主の再臨の日に完成に至るという明確な目的のもとに神が着

手したわざなのです。

これは聖書にある最も偉大で慰め深い教理の一つでしょう。いわゆる「聖徒の堅忍」という教理です。この教えを知らなかったかつての私は、心の底に不安がありました。信仰を告白して洗礼を受けたとはいえ、いつ自分は信仰から脱落してしまうか分からない。今はまだ大丈夫だが、将来、この恵みの状態から落ちないという保証はないと思っていました。しかし初めてこの「聖徒の堅忍」の教えを学んだ時、ビックリしました。確かに私の信仰がもし神によって始まったなら、その神によって必ず最後まで導かれる。神がそのように導いてくださる！これは何と素晴らしい希望のメッセージでしょう。

もちろんこれは私たちは単に受身的な存在で、私たちにすることは何もないということの意味しません。もしそうであるなら聖書はいらないことになります。様々な勧めや命令は不要になります。しかし聖書があり、また戒めや命令があるのは、私たちにすることがあるからです。そのように私たちに取り組むべきことがありつつも、それを神が上からの主権的な御手をもって用いて私たちを最後まで導いて行ってくださる。だから私たちはその神を見上げ、信頼し、神が言われることに聞き従って行けばいい。パウロはこの神がピリピ人たちの歩みの背後にいて、彼らを導いておられることを見て取っていました。その方が彼らのうちに良い働きを始めた方として、彼らを今あるように導き、さらに最後の完成の日に至るまで導き続けてくださる。そのことを思ってパウロは神に感謝し、喜びに包まれずにはいなかったのです。

第3に見たいのは7節です。パウロはここで「私があなたがたすべてについてこのように考えるのは正しいのです。」と言います。パウロはこれまでピリピ人たちについて神に感謝し、喜び、彼らの将来について大胆なことまで述べましたが、これは決していい加減な言葉なのではない。そう言える根拠がしっかりあるということです。すなわち神が良い働きを始めていることを指し示す明確なしるしがあるのです。

7節に「あなたがたはみな、私が投獄されているときも、福音を弁明し立証しているときも、私とともに恵みにあずかった人々であり」とあります。パウロが投獄されていたこの時、ピリピ人たちはパウロの側に立って支援を惜しみませんでした。使徒の働きを読めば、このパウロの投獄は、もちろん悪を行なったことによるものではなく、ローマ市民の権利に基づく裁判を待つためのものであったことが分かりますが、それでも鎖

につながれた囚人と関わりを持つことは、自分たちの身の危険も考えなければならないことだったでしょう。しかし彼らはパウロと関わりを持ち続けることを恥ずべきこととせず、福音のために、パウロと同じ立場に立ち、自らをささげていました。また「福音の弁明と立証において」という方は、ローマに限らず、これまでなされたパウロの宣教活動全般に当てはまるものと見ることができます。その働きにおいても彼らはパウロとともに歩んだ。

注目に値することは、このような福音のための労苦が「恵み」と表現されていることです。後の1章29節で「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。」と語られます。「賜った」というのは「プレゼントされた」ということです。つまりキリストのために苦しむ生活も「恵み」なのです。そしてここでも「あずかった」という言葉が使われています。すなわち5節に出て来た「交わり」と訳される言葉がここに含まれています。パウロのピリピ人に関する喜びと彼らの将来に対する確信は、このようなピリピ人たちの現実の姿と切り離して考えることはできません。パウロはこのような彼らのことを心に覚えており、それゆえに私がこれまで述べて来た通りに考えることは正しいのだと言っているのです。

以上の箇所から、最後にまとめとして二つのことを心に留めたいと思います。一つは私たちの救いは神によって始められ、神によって成し遂げられていくということです。素晴らしい聖書のメッセージは、私が今持っているこの信仰は、私から始まったのではないということです。それは神から始まったのです。神が良い働きを私の内に始めてくださったのです。私たちはそのことを改めて神に心から感謝したいと思います。

そしてそうであるなら、これからも最後まで神が導いてくださいます。先に触れたように、これは間違った意味で私たちを受け身にはしません。神は私たちをロボットのように扱いません。神がきよめる働きを私たちの内に進める場合、私たちの意志をきよめるというプロセスを踏まれます。2章13節：「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。」ですから私が知らない間に、神がいつの間にか聖化の歩みを完成させてくださるということはないのです。神は私たちの意志に働きかけることによって、私たち自身がそれを願い、取り組むという仕方を通して、私たちを導かれます。ですから私たちは自分の救いをひとごとのように考えるのではなく、主体的に考えなければなりません。そして神が私たちのうちにみ

わざを進めるための通常的手段を熱心に用いるように努めなければなりません。すなわち御言葉に良く聞くこと、祈りの生活をする、そして従う歩みを求めて行かなくてはなりません。こうした取り組みを通して、神が完成に至るまで導いてくださるのです。私たちはこの神を見上げて、キリスト・イエスの日に完成する救いの道を歩ませていただきたいと思います。

そしてもう一つは、この神の良い働きは、私たちの生活に見える実を結び始めるということです。もちろん地上における私たちの実是不完全なものです、しかしそこにいのちがあるなら、実には結ばれて来ます。その重大な一つの実が、今日の御言葉によれば、福音を広める働きに携わることです。確かに福音を伝える働きには労苦が伴います。これに関わらない方が、ある意味で平穏で楽な生活を送れます。しかし神の救いを本当に頂いた人はそうはできません。自分のところまで届けていただいたこの福音を自分のところで止めてしまって良いはずがない。またこの素晴らしい福音を一人でも多くの人に伝えずにいられないという思いに駆り立てられる。そして私たちがそう思うだけでなく、神がそうするようにと私たちにはっきり命じています。この福音こそ、神が世界にご自身の働きを進めるために用いる第一の手段だからです。私たちは神の良い働きにあずかっているなら、この福音宣教の働きにどういう形で加わるようにという神からの本能的促しを与えられているのではないのでしょうか。そしてそのようにして福音のために奉仕すること、労苦してでも仕える機会を与えられることが「恵み」なのではないのでしょうか。

良い働きを始めてくださった神は、キリスト・イエスの日の完成に至るまで私たちを導き続けてくださいます。私たちはこの真理を感謝し、神に益々信頼を置いて、これからの歩みも導いていただきたいと思います。そして神の良い働きにあずかっている者であることを益々福音を広めるための働きに身を投ずる歩みに現わし、最後の完成の日を目指す神の導きの中を歩んで行きたいと思います。